

教育学部学生による地域の児童向け講座におけるモバイル端末活用

和歌山大学教育学部 学生 辰巳 奈穂

nahotatsumi@gmail.com

まちかど土曜楽交 <http://www.wakayama-u.ac.jp/machikado/cat10/>

キーワード：情報活用の実践力、モバイル端末活用、教師のICT活用指導力

1. はじめに

現在、多くの児童らは放課後や休日に習い事をおこなっている。昔ながらの、習字やそろばん、公文式にはじまり、各種スポーツクラブやその他音楽・絵画など芸術系の習い事、進学・学習塾や英会話教室など多種多様である。しかし、学校外で「情報活用能力」を伸ばす塾や習い事は存在していないといえるのではないだろうか。

そこで、教育学部学生が中心となって、各種情報メディアを活用して、児童・生徒らの情報活用の実践力や主体的な学びを促進するための学習活動を立案した。これは、土曜日に異学年の児童・生徒らを大学（サテライトキャンパス）に集めて、子どもたちの知的好奇心や創作意欲を掻き立てる学習活動として実現するに至った。ここでは、一連の活動の中でも、特に情報機器を有効活用した4つの事例を紹介し、その成果を報告したい。

2. 活動の目標と概要

(1) 「まちかど土曜楽交（がっこう）」の目的

本実践は、和歌山大学教育学部学生によって休日に実施する地域の児童向け講座「土曜楽交」の取り組みである。当講座が目指すものは、学校の授業のような教科書に沿って学習内容が決められたものではなく、進学・学習塾のようにテストの得点アップを目指したものでもない。よって、当講座名には、「土曜学校」ではなく、敢えて「土曜楽交」という造語を用いた。

その目的は、学習を楽しむことと、学習活動を通して、子ども達と大学生、そして地域の方々や保護者、異学年の児童らとの交流をおこなうことを目的としている。よって、何をどれだけ学んだかというよりは、知的好奇心を持つこと、学び方を学ぶこと、どれだけ多くの人とコミュニケーションできたかを重視した。

(2) モバイル端末活用の意図

「まちかど土曜楽交」でモバイル端末を活用する意図は、限られた時間内に効率的に情報を集め、まとめ、発信するために活用することにある。また、子どもらの学習へのモチベーションの維持・向上にも役立っている。

加えて、指導者側である教育学部学生にも、実践を通してのねらいがある。それは、小学校段階で、情報機器をどのように用いれば、児童らの学びのツールとして機能するのか、または児童らがどの程度、それらのツールを使いこなせるスキルを持っているのかといった理解ができる点が挙げられる。

更に、将来教職に就いた際に、情報機器を活用した授業を設計し、自らの授業実践にICTの利点を取り入れられるようになるといったねらいもある。

3. 実践内容

3. 1 情報機器（モバイル端末）活用の具体例

(1) まちなか今昔探検

これは、数十年前の昔の町並みの写真を持って町に繰り出し、現在どのように変化しているのか、昔の名残はあるのかを調査し、ビフォーアフターで比較した写真を解説する壁新聞をつくる取り組みである。土曜楽交は、土曜日の午前中の2時間半の時間しかないために、いかに効率的に取材（撮影）し、印刷し、情報検索できるかがポイントになる。その点、モバイル情報端末は1台で全てをこなすために必須の機器となっており、軽量且つ動作も軽快であり、子どもたちの取材・創作ツールとして有効活用できている。



写真1 今昔探検取材後、画像印刷やポスターセッションを行なっている

(2) 暗記問題クイズづくり

モバイル情報端末（iPad）を使って、ブラウザによる情報検索とプレゼンテーションソフトウェアを組み合わせてクイズを作成し、相互に出題することで、暗記しなければいけない事象を、楽しく且つ覚えやすくする取り組み。ありきたりな歴史の年代暗記などではなく、一般的には学習ソフトウェアに収録されていない、地域の偉人や特産物などを扱うところに特色がある。



写真2 iPadが即席のプレゼンツールとなる
グループ内プレゼンなどでは単体でも可能

(3) 商店街のチラシ（ポスター）作成

まちなかにある商店街を訪問・インタビューして、お店の特徴やおすすめの品などを取材し、一枚のチラシに仕上げる取り組み。作成したチラシは、そのお店に持っていき、評価をもらう。うまくいけば、本当にお店に掲示して頂ける。評価を受けてすぐに改善して、複数枚の印刷に対応できるなど、ICTの利点を発揮した取り組みとなった。



写真3 取材活動・プリントアウト・情報検索等が一台のモバイル端末で可能
(写真は商店街取材の様子)

(4) 星空を再現しよう

モバイル情報端末 (iPad) の天文アプリ (Star Walk) を使って、方角を確かめたり、惑星や星座の位置を確かめる。黒い画用紙にマジックや蛍光シールを使って、興味をもった星座を描き、壁や天井・床に貼っていくと、部屋一面が星空のようになる。従来の星座盤とは異なり、方角などを自動調整してくれるので、初歩的な段階でつまづくことなく、自らの興味におうじた活動的な理科の学習を支えるツールとして役立つ。



写真4 iPadが星座盤と天文辞典の両役をこなす問題解決型授業の設計に役立つ場面が多い

3. 2 ICT活用とその工夫

毎週土曜日の 10:00~12:30 というわずかに二時間半の間に、課題意識を持たせ取材活動をして、まとめ(壁新聞やチラシ、プレゼン等)・発表・評価をおこなうために、効率的に授業を進める必要がある。よって、情報機器の円滑な操作は必須である。その点、iPad touch のようなモバイル端末ははじめてでも操作がわかりやすく、情報検索ツール、デジタルカメラ及び画像アップロードツール、ダイレクトプリント、位置情報取得など、一台ですべてをこなすことができる。また、iPad ぐらいの大きさになれば、4人に1台体制でも写真の確認やプレゼンスライドの作成などもでき、子どもたちの発表ツールとして役立っている。

そもそも、そういったモバイル情報端末そのものに対しての興味・関心も強く、学習のモチベーションを向上させる・維持することにも役立つ。

4. 成果

4. 1 「まちかど土曜楽交」を通じての学生の成長

この取り組みは、4, 5, 6年生による異年齢と異なる小学校の児童が集まって実施されており、ほとんど初対面同士である。

そういった集団での取材活動やグループ活動での分担作業などはなかなか円滑に実施できない。そこで、4~5人の児童に対して、教育学部学生が1名ついて、コーディネーター役につとめている。つまり、初対面でおこなうワークショップにおけるファシリテーター役を大学生が担っているといえる。

最初は、児童同士のぶつかり合いや、分担がうまくいかない場合もあるが、大学生の指導によって、子どもたちは徐々にそれぞれの目的を持った活動に展開していけるようになり、取材活動も数回重ねると、円滑におこなえるようになった。初対面での関わりをうまくつくることで、児童間の揉め事も解消し、自主的な活動につながるができるようになっていった。

学校教育においても、フィールドワーク的な活動は教科単位によっては実施される場合がある。しかし、取材ツールが揃っていないかったり、まとめ方に制限があるなど、自由度や学習活動への関わりが浅いという。しかし、少人数且つ豊富な機器と支援スタッフ(学生)によって、細かい点まで配慮されているために、短時間とはいえ、児童一人ひとりが学習のプロセスに深く関わる事ができた。

グループ学習の楽しさや創作的な学習活動の達成感などを得ることができたといえる。なお、教育学部学生にとっても、一斉画一的な授業に陥りがちな教育実習授業などに、児童の声や考え方に目を向けることができるきっかけにもなったのではないかと考えられる。

4. 2 学生のICT活用指導力の向上

実践の会場となる「和歌山大学まちかどサテライト」には、情報機器環境が常設されているわけではない。よって、学習の目的を達成するためには、どういった機器がどの程度必要で、そのための設定や各種機器の使い方をどこまで習得しておくかを考えなければならない。これ自体が、学生のICT活用指導力を向上させる機会となっている。プロジェクターの設定や、デジタル教材の作成にはじまり、モバイル端末の無線LANへの接続やクラウドサービス、ワイヤレスプリント等々実践を見通して、どういった場面でICTを活用するかをシミュレーションしておく必要がある。こういった点で、学生にとっては、将来的に教職に就き、学級内で取材活動や情報活用能力の育成を目的とした授業を設計する際に役立っているのではないかと考えられる。

5. 今後に向けて

「まちかど土曜楽交」は、和歌山大学が毎週土曜日に開講する子ども向け公開講座で、教育学部学生が担当している。学校の授業や塾でのテスト対策からは切り離して、児童らの情報活用能力の育成、学び方の学習、知的好奇心を育む活動を重視した取り組みである。

当実践では、学生の教材作成用・情報提示用として多くの情報機器を活用する。また、児童らの情報検索や取材活動には、最新のモバイル情報機器を用いた取り組みをおこなっており、それらの機器を学習の目的を達成するための効果的なツールとして活用しているところがポイントである。

教員を志す学生にとって、ICTが果たす役割を意識して、効果的に使用できる場面を考え実行できる場は少ない。また、子どもたちにとっても、最新の機器を使った活動的な学習の機会は少ない。これらの両者のニーズがマッチし、ICT活動指導力や主体的な学習活動の推進を目指す教育学部学生と、好奇心を抱いてアクティブな学習を欲する子どもたちが交わる場として発展していけるよう、これからも努力していきたい。